

The Kagawa Museum NEWS

Vol. **47** | 香川県立ミュージアム ニュース 2019 冬

講演会 聴講無料・要事前申込

特別展「第66回日本伝統工芸展」関連

◎「今右衛門の色鍋島の伝統」



今泉今右衛門氏

日時：令和2年1月11日(土) 13:30～15:00
 場所：地下1階 講堂
 講師：今泉今右衛門氏
 (重要無形文化財「色絵磁器」保持者(人間国宝))
 定員：230名(先着順)
 申込期間：受付中～、定員になり次第終了

講座 聴講無料・要事前申込

◎ミュージアム・スーパープレゼンテーション2020

当館では美術、歴史、民俗などについて、日々様々な活動が行われています。今年度の活動を通じて考えたことを担当者がリアルにプレゼンします。

日時：令和2年2月23日(日) 13:30～15:00
 場所：地下1階 研修室
 講師：当館職員4名
 定員：70名(先着順)
 申込期間：令和2年1月15日(水)～、定員になり次第終了

講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、かがわ電子自治体システム^(※)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、講演会の名称を明記してください。
 申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課
 TEL.087-822-0247 FAX.087-822-0049

ワークショップ 要事前申込

特別展「第66回日本伝統工芸展」関連

①子どものための伝統工芸鑑賞事業

「うるしにチャレンジ(彫漆)」

日時：令和2年1月13日(月・祝) 午前の部9:30～12:30/午後の部13:30～16:30
 ※応募の際に午前・午後どちらを希望するかを明記してください。
 場所：地下1階 研修室
 講師：石原雅貝氏(漆芸家)ほか
 対象：小学4～6年生とその保護者
 (※1組につき、保護者は1名のみ)
 定員：午前・午後 各28名(全56名)
 (応募者多数の場合は抽選)
 参加料：参加者1人につき1,000円
 保護者は別途観覧料(団体料金)が必要
 申込期間：令和元年12月8日(日)～12月21日(土) ※当日消印有効



一昨年度の様子

②「高松張子づくり」

讃岐の伝統工芸である張子人形。原型作りから絵付けまで、全ての工程を体験して作ってみませんか。

日時：令和2年2月15日(土)、2月16日(日)
 13:30～16:00(2日間とも参加できる方)
 場所：地下1階 工作室
 講師：当館ボランティア
 対象：一般(中学生以上)
 定員：18名(応募者多数の場合は抽選)
 参加料：500円
 申込期間：令和2年1月9日(木)～1月28日(火) ※当日消印有効

ワークショップの申込方法

往復はがき(1枚につき2名まで)、かがわ電子自治体システム^(※)を利用したインターネットでお申込みください。往復はがきの場合は、ワークショップ名、「うるしチャレンジ(彫漆)」にお申し込みの場合は希望時間(午前か午後)、氏名(ふりがな)、学年(児童・生徒の場合のみ)、住所、電話番号を明記してください。抽選の結果の発信・発送は締切日から1週間ほどで行う予定です。
 申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課

カフェポット ミュゼ

讃岐の郷土料理「あん餅雑煮」を漆の器を利用して提供予定です。
 販売期間：令和2年1月2日～1月31日



ミュージアムショップ

第66回日本伝統工芸展に開催に合わせ、関連書籍を取り揃えております。



■営業時間：9:00～17:00

香川県文化会館 観覧料無料

◎香川県文化芸術新人賞展

平成29年度の「香川県文化芸術新人賞」受賞者、漆芸家 神垣夏子氏と鉛筆で描く画家 安富洋貴氏の作品を展示します。

会期：令和2年2月8日(土)～2月24日(月・振休) 会期中無休
 会場：香川県文化会館
 時間：9:00～17:00

瀬戸内海歴史民俗資料館 観覧料無料

古城をイメージした石積みの外観が印象的な建築は「日本建築学会賞」をはじめ多数受賞した、建築家・山本忠司の代表作。



回廊式の展示室では、木造船や船大道具などの民俗資料を中心に瀬戸内のくらしと文化をたどります。瀬戸内海が一望できる展望台もお楽しみください。

開館時間：9:00～17:00 ※入館は16:30まで
 休館日：月曜日、令和元年12月29日(日)～令和2年1月3日(金)

瀬戸内海歴史民俗資料館 講座 聴講無料・要事前申込

①れきみん講座「香川における魚の利用の歴史」

香川県で古くから漁獲されてきたサワラ、イワシなどについて、漁具漁法の変遷、漁獲量の推移、加工や流通などの資料をもとに、どのように利用されてきたのかを紹介します。

日時：令和2年1月18日(土) 13:30～15:00
 場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室
 講師：川西敦(瀬戸内海歴史民俗資料館 主任)
 定員：40名(先着順)
 申込期間：令和元年12月18日(水)～、定員になり次第終了

①れきみん講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」^(※)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、講座名を明記してください。
 申込先：〒761-8001高松市亀水町1412-2 瀬戸内海歴史民俗資料館
 TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」
 香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック



いろいろまいまき えかんしつばこ つき いん
 三好かがり 彩切貝蒔絵乾漆筒「月の韻」
 第66回日本伝統工芸展・NHK会長賞を受賞した本作は、月の持つ神秘的な様相を洗練された感性で表現した作品です。乾漆という技法は、型に和紙や麻布を漆で貼り重ねて形を作るため、自由な造形を表現できるとされます。「夏は夜」から始まる、『枕草子』中の一節をイメージしたという本作は、冬本番に開催される高松展からは遠い季節ながら、「月のころはさらなり」という夜半の夏を感じさせてくれます。

CONTENTS

- 特集 地域連携グループの活動
- 調査研究ノートvol.31 絵画と文字×比喩と象徴 メタファーとシンボル
- れきみんだより 海の文化の情報発信 一網の再整理・調査を通してー
- 特別展紹介 第66回日本伝統工芸展
- トピック 玉楮象谷作品が県指定文化財に仲間入り
- 展示室だより 道具とくらしのうつりかわり
- アートコレクション 猪熊弦一郎 色と形の遊び

香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
 TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
 http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
 TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
 http://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10-39
 TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807



地域連携グループの活動

香川県立ミュージアムの学芸課は、企画、収集管理、地域連携の3つのグループで構成されています。今回はこの中で、地域連携グループの活動について紹介していきます。

中期活動計画と地域連携グループ

地域連携グループは平成29年に発足した新しいグループです。このグループの発足には、香川県立ミュージアムの中期活動計画が関係しています。

中期活動計画とは、平成30年度から令和4年度までの5年間にわたるミュージアムの活動方針を定めたものです。くわしい内容は当館のホームページに掲載していますのでご覧ください。

中期活動計画に掲げた3つの使命の1番目に次のようなことが掲げられています。

地域の人びとと地域活性化に取り組み、

ともに成長するミュージアム

中期活動計画はミュージアムの活動すべてにかかるもので、一つのグループだけが担うものではありませんが、地域との関わりを考え活動していくという指針が地域連携グループの発足に大きく関わっています。

学習支援と地域連携

地域連携グループが発足する前には学習支援というグループがあり、小中高の学校や大学などの活動や生涯学習を支援する業務等を担当していました。学習支援業務は地域とのつながりとしてもとらえることができます。地域連携グループは、さ

まざまな世代の学習支援も含め、地域とミュージアムがつながりをもってどのようなことができるのかを考え、活動しています。実際の活動の中から2つについて紹介していきます。

学校学習の支援

学校における学習支援のひとつとして、ミュージアム活用研究会とティーチャーズ・プログラムという取り組みを行っています。

ミュージアム活用研究会(以下、「活用研」)は、当館を学校がどのように活用できるのかを、委員をお願いした学校の先生とともに考えていくものです。ここ数年、活用研で主として取り組んでいるのは、当館の収蔵品を学校の学習の中でどのように活用できるかです。学校の授業で、香川ゆかりの作品や資料もっている豊富な情報を活かす方法を先生たちとともに考えています。

この活動の成果として、収蔵している絵画や立体作品の写真をカードにした「アートカード」、香川県と関係の深い芸術家イサム・ノグチの生涯を表した紙芝居風教材、高松藩の城下町を描いた「高松城下図屏風」を黒板に張り出せるようにした小型複製、丸亀藩の参勤交代の様子を描いた絵馬の小型複製等を制作してきました。活用研で検討するのは、これらの教材を単に制作だけではなく、それを使った具体的な授業プログラムの想定も行っています。貸し出せる複製をつくることを目的とするのではなく、多くの学習現場で利用してもらうことに重点を置いています。

ティーチャーズ・プログラムは、学校の先生を対象とした講座です。ここでは、活用研において検討・開発した教材とプログ

ラムを紹介し、活用の促進を図っています。現場において利用する上での意見を募るようにもしています。

活用研とティーチャーズ・プログラムは独立した別々の活動ではなく企画・制作から普及・浸透までの一連のつながりをもった事業として展開しています。ミュージアムが関わりながら、現場の先生方が主体的にミュージアムの収蔵する作品や資料を活用することを目指しています。

地域資料の発見と活用

取り組み始めたばかりの活動ですが、昨年度、県下の公民館で地域資料を用いた展示を開催しました。ちょっと変わっているのは、展示した資料は地元の方々に声をかけて出品されたものであったという点です。公民館と協力し、管轄区域に「ちょっと古い道具」「ちょっと古いモノ」の出品を促すチラシを配布し、その結果集まった資料を展示するという形式をとりました。

呼びかけと集約は公民館が担当し、展示構成や準備・設営はミュージアムが担当しましたが、分離した作業として行うのではなく、相互に協働しながら運営を行いました。

この事業の目的は、展示の開催ではなく、その過程にありました。呼びかけに応じて出品したものが展示というかたちで意義付けられることによって、各家に伝来するものや残されているものに地域のあゆみを示す資料としての意味があることに気付いてもらう。そこから地域で資料を伝え遺していく意識につなげていく、ということをおねらいとした事業です。

背景には、災害被災における地域の文化遺産の喪失があ



展示における出品者と地元小学生との交流

ります。東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨など近年に限っても多くの自然災害が発生し、その中で文化遺産を救済する取り組みが行われています。これらの中で、救済前に廃棄されてしまうケースも多数報告されています。地域のあゆみは、その地域がもっているもので語られることに気付いてもらうことで、失われていくことを食い止めることにつなげられないかという発想が事業開始の原点にあります。

出品された資料はミュージアムが収蔵するのではなく、各家にお戻ししました。地域自身が守り伝えていくことにも大きな意味があるとの考えからです。ミュージアムだけが収集、活用を担うのではなく、地域で保存や活用していく方向を考えるための試みです。

地域連携のために

地域連携グループでは今回紹介した事業の他にも取り組んでいます。今回紹介した事業が特に顕著ですが、「ミュージアムが何かを行う」事業だけではなく、「ミュージアムと学校の先生」、「ミュージアムと地域の人びと」というように、地域と協働することも視野に入れて活動しています。ミュージアムにとって、地域との連携は欠かすことのできない要素になります。どのようなかたちでつながることが、よりよい成果につながるのか今後も試行していきます。

(主任専門学芸員 御厨 義道)



活用研での教材検討、試作品をもとに具体的な活動やその成果を考える



研究会での検討をもとに作成した試作教材を使った委員の先生による授業



公民館での展示風景、集まった展示品はすべて地元からの出品

絵画と文字×比喩と象徴

メタファーとシンボル

日本語に限らず文字や言語には特定の意味が内包されながらも、私たちは社会生活を過ごすなかで繰り返し活用し、既往の意味に対して柔軟に加筆、修正を加えてきました。もちろん文字の持つ普遍性にこそ重要な意味があり、長い歴史とともにその解釈が変化する場合もあり得るでしょう。つまり文字および言語は、私たちが先人たちの遺産として受け継いでいますが、意味が固定的に制限されたわけではないのです。多様化する現代の日常生活において、文字の意味は複雑に変容し、過去の遺産としての文字あるいは言語だけでは表現しようとする内容が情報として十分に伝達されないという事態を少なからず招いてきました。高度経済成長期において急速に変化する社会情勢のなかで、迅速な情報共有を行うことが求められるようになると、このジレンマは、より簡潔な情報伝達の方法として既存の言語の簡略化を促し、文字の形状そのものが象徴化され、新たな意味を包含する新言語の登場をも誘発し、より効率的な情報伝達の規範として整えられるようになります。また、これは社会経済に与える効果のみならず、教育現場あるいは文化芸術活動へも浸透、応用されて、新時代にふさわしい現象を支えるきっかけともなりました。とりわけ美術活動においては、根源的な伝達行為の手段として文字の形状特性の造形化と比喩的表現の展開に利用する美術家も多く存在します。

戦後現代美術の旗手、吉原治良(1905-1972)は前衛書家との交流をとおして抽象表現へと向かうことになるのですが、晩年に至るまで取り組んだ「円」への執着には、日本的象徴としての意味をどう解釈するかという主題が大きく関与していま

す。文字に与えられた意味とその形而上のニュアンスから認識される重層的で複雑に絡み合う日本語の特徴的な資質が、吉原の抽象表現の原点となったのです。元来文字は、絵画的な視覚伝達の媒体として汎用性のある表現として流通し、時代に即して参照と改訂を繰り返し、新たな意味を創成する極めて自由な表現手段として高められました。記号として何らかを象徴的に表す文字は、次第に視覚的な意義に目覚めることで、美術家たちのモチーフとして応用されていったのです。

絵画の意味は日本の伝統的な詩歌や古典文学にみる美学的に世相に喚起するというこれまで果たしてきた役割の範疇を越えて、日本を象徴する造形表現として、海外の美術の動きの中で日本はその復権を目指すきっかけともなりました。ポストモダンの隆盛は、こうしたアメリカ現代美術への反動とともにその独自性を発揮し、戦後の日本美術の創成に貢献したといえるでしょう。

常設展「絵画と文字×比喩と象徴 メタファーとシンボル」では、日本文化の精華として位置づけられる書と、戦後日本の比喩表現とそれを象徴する造形について紹介しようとするものです。

(美術コーディネーター 田口 慶太)



小森秀雲「沙羅」1989年 当館蔵

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

絵画と文字×比喩と象徴

メタファーとシンボル

令和2年1月25日(土)～3月22日(日)

会 場: 常設展示室4・5

開館時間: 9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

休 館 日: 月曜日(ただし2月24日は開館)

及び2月25日(火)～3月9日(月)

■ミュージアム・トーク: 2月1日(土)、3月14日(土) 各13:30～

海の文化の情報発信

— 網の再整理・調査を通して —

瀬戸内海歴史民俗資料館は、瀬戸内海地域の漁撈用具を収集し、その内2843点が1977年に国の重要有形民俗文化財に指定され、翌1978年にはこれらの資料を裏付ける調査報告書を刊行しました。近年、瀬戸内国際芸術祭などで瀬戸内地域を訪れる人が急増、海の文化への関心が高まる中で、当館はこれらの資料を再整理・調査をし、海の文化に関する一層詳細な情報発信を行っています。



小田の打瀬網と底曳網漁師

対象は職員単独で扱うには大きすぎる漁網で、ボランティアに協力いただいて図面化を行っています。上の写真はさぬき市志度町小田^{うたせあみ}の打瀬網の調査の場面です。打瀬網は風力で曳く底曳網ですが、高松市瀬戸内町の漁師が網の歴史に興味を持って調査に参加し、網の袋口の高さに驚いているところです。底曳網の動力化に伴う網の仕立ての変化が明らかになりました。

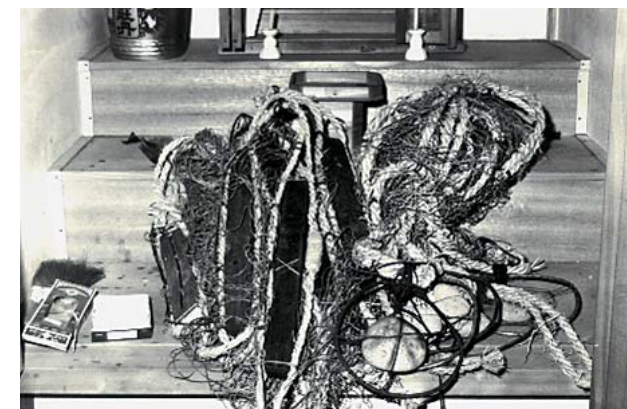
また、瀬戸内町で使用された底曳網の一種のゴチ網の調査では、同町の経験者に参加してもらいました。海底で網を滑りやすくするために、扁平な石のおもりを使用したことや、網を開きやすくするため船上での網の収納法を工夫したことについて説明を受け、これは当館での網の収納や展示に役立ちました。この活動の様子は、NHK高松放送局の「ゆう6かがわ」で放送されました。また同町では網に大漁の神が宿ると考え、これを神棚に祀る珍しい行事もありました。網は魚を捕るだけでなく、さまざまな意味を喚起する多面的な力があることが分かってきています。



瀬戸内町のゴチ網の石のおもり



瀬戸内町の漁師による網の収納法の説明



瀬戸内町の神棚に祀られたゴチ網(高橋克夫氏撮影)

今後は参加者の輪を広げ、地元の漁師やボランティアと協働して、現場での気づきを大切にしながら、展示や報告の形で、海の文化の情報発信を行いたいと考えます。

(専門職員 真鍋 篤行)

第66回日本伝統工芸展

日本伝統工芸展は、昭和29年(1954)以来毎年開催されている国内最大規模の工芸公募展です。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の7部門からなる入選作品は、受け継がれてきた技術を継承しつつ、新たな工芸を生み出すという本展の指針を体現し、令和を迎えた本年度は66回目の開催となります。

今年度の高松展では、重要無形文化財保持者(人間国宝)の作品46点を含む280点を展示します。漆芸部門の入選作品の全点展示は、東京展を除く巡回展では高松展のみとなっており、香川漆芸の伝統を受け継ぐ重要無形文化財保持者・太田儔^{ひとし}、山下義人をはじめ漆芸研究所関係者、香川県ゆかりの作家たちによる作品は見どころの一つとなっています。

(学芸員 佐々木 麻衣)

展覧会情報

第66回 日本伝統工芸展

令和2年1月2日(木)～1月19日(日) 会期中無休

会場:特別展示室、常設展示室4・5

会館時間:9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

観覧料:一般620円、前売・団体500円

高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料

■公益社団法人日本工芸会四国支部会員による解説

1月4日(土) 近藤裕美子氏(諸工芸)、5日(日) 栗原慶氏(陶芸)、

12日(日) 佐々木正博(漆芸)、18日(土) 石原雅員氏(漆芸)、

19日(日) 亀田緑光氏(陶芸) 各13:30～

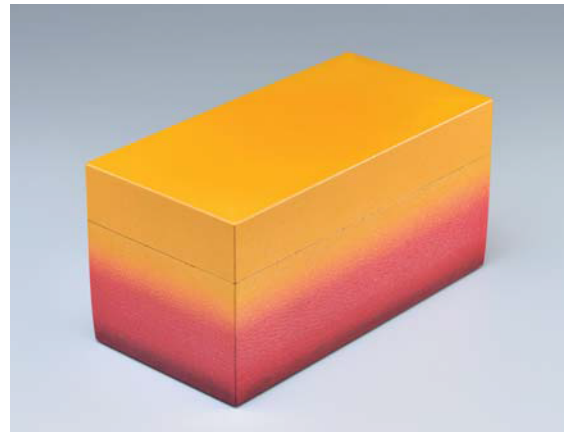
■当館ボランティアにおけるギャラリー・トーク

1月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)、13日(月・祝)、18日(土)、19日(日) 各10:30～

関連イベントはp.8インフォメーション欄をご覧ください。



らんたいきんまぼこ
太田儔 藍胎蒔醬箱「さくら」



やまよそお きんまぼこ
山下義人 「山装う蒔醬箱」

トピック

玉楮象谷作品が県指定文化財に仲間入り

たまがじ ぞうこく
玉楮象谷(1806～1869)は、江戸時代後期に高松藩主の御用を中心に讃岐で活躍した漆工です。象谷は、漆を彫って文様を表しており、その技法は現代でも蒔醬・彫漆・存清として受け継がれています。今回、当館がさいしききん まりようし ぼこ すずりぼこ ついしゅうづみぼこ えんつうじ 収蔵する「彩色蒔醬料紙箱及び硯箱」、「堆朱鼓箱」、圓通寺(さぬき市)所蔵の「存清鏡箱」が新たに香川県指定有形文化財に指定されました。いずれも象谷の高い技術力と発想力が遺憾なく発揮されています。また、作品そのものに記された年紀によって制作時期が分かる、象谷の基準作として高く評価できる作品でもあります。

新たに文化財に指定された作品は、第66回日本伝統工芸展の会期中に公開します。技法ごとに多様に表現された象谷作品をぜひご覧ください。

(主任学芸員 鹿間 里奈)



玉楮象谷「彩色蒔醬料紙箱及び硯箱」 嘉永7年(1854) 当館蔵

常設展示室1

道具とくらしのうつりかわり

令和2年1月2日(木)～3月22日(日)

わたしたちが使う生活の道具は、時の経過とともに大きく変化してきました。

今から60～70年ぐらい前までは、ご飯炊きや洗濯などの仕事にたいへん時間がかかりました。しかし、羽釜やめしびつ、洗濯板、炭火アイロンなど、その当時使っていた道具を見ると、形や仕組みなどに昔の人々の知恵がこめられています。

人々の生活を大きく変えたのは、電気やガスの利用でした。香川県では電気が1895年(明治28)、ガスが1911年(明治44)に、高松市で使用が始まります。どちらも初めは明かりとして利用されましたが、やがて様々な製品が開発されていきます。多くの家庭に電化製品やガステーブルが普及していくのは、1950年代後半(昭和30年代)以降です。

この展示では衣・食・住の道具について、人の力や、炭火・薪など自然の燃料を活かした道具から、電気・ガスを使う製品への移り変わりをみていきます。小学校の社会科や総合的な学習でご利用ください。また、大人の方も昔の生活に想いをはせてみてはいかがでしょうか。

(主任専門職員 藤田 順也)

■ミュージアムトーク/1月25日(土)・2月8日(土)・2月22日(土) 各13:30～



めしびつ めしぶこ
左上:羽釜 右上:飯櫃・飯釜 左下:電気炊飯器 以上、当館蔵
右下:電子ジャー 個人蔵



上:ガスストーブ 左:ガステーブル 右:ガス炊飯器 すべて当館蔵

常設展示室2

アート・コレクション

猪熊弦一郎 色と形の遊び

令和2年1月2日(木)～5月10日(日)

当館の所蔵作品の中から、猪熊弦一郎(1902～1993)の作品を紹介します。

猪熊は、1902年に高松市に生まれ、フランス、ニューヨークと活動の拠点を移しながら、戦後アメリカの新しい美術に触発され独自の表現を見出しました。

晩年には色と形がキャンパスの中で自由に遊ぶように描くスタイルを確立しました。

猪熊の作品には、造形表現における最も基本的なカタチ、○や△や□が頻繁に登場します。幼い子どもが簡単に描けるこのカタチは、猪熊の純粋さを象徴的に表しています。

自身に真摯に向き合い、90年の生涯を通して、描き続けた猪熊弦一郎。「描くことは生きること」そう語った猪熊の色と形にまつわる画家としての軌跡をたどります。

(学芸員 高嶋 良子)

■ミュージアムトーク/2月15日(土)、3月21日(土) 各13:30～

■当館ボランティアにおけるギャラリー・トーク/会期中 日曜日(1月26日(日)～3月29日(日)の間のみ実施) 各11:00～12:00